

フークトープ通信 71

震災十五年、避難指示解除十年

寺田 亮 (南相馬市)

東日本大震災から十五年が経過した。そして、七月には南相馬市小高区の避難指示解除から十年の節目を迎える。私自身、太平洋沿岸を襲った津波により住居を失い、原発事故後、避難指示区域が定められてからは、災害対策本部に配属されていたこともあり、大変な経験をした。

さて、そんな南相馬市の状況を、遠く神奈川県から見つめ続けた作家がいる。同市小高出身の志賀泉氏である。

志賀氏は一九六〇年生まれ。県立双葉高校卒、二松学舎大学卒業後、東京の書店に勤めながら、文学作品を書き続け、『指の音楽』で二〇〇四年の太宰治賞を受賞した。その後、『T S U N A M I』

を発表した。



東日本大震災後は、『無情の神が無い降りる』(二〇一七年 筑摩書房)、『百年の孤舟』(二〇二四年 荒蝦夷)、『爆心地ランナー』(二〇二五年 コールサク社)の三作品が

ある。『無情の神が無い降りる』は、故郷の「小高」を舞台とし、避難が困難な母親の世話のため避難指示区域に残り、過去の出来事を回想する男性の物語、『百年の孤舟』は、漁師の先祖を持ち、津波と原発事故で避難生活を送る妻子持ちの兄と警戒区域の実家の写真を送信した弟との「複雑な関係」の物語など、さまざまな被災者の視点から、小高とわかる地名と相馬地方の言葉を用いて描いている。

最新作『爆心地ランナー』は、東京に避難している十四歳の主人公が、自分と同じ十四歳で夭逝した障がい者の姉と、その娘を死なせたという自責の念で自殺した父親への思慕に対し、コロナ禍で延期された東京五輪の聖火リレー開催地となった故郷の双葉地方で、主人公から溢れ出る複雑な思いを、疾走感をもって描いた作品である。

これらの作品が刊行される前の二〇一三年に、映像作家で専修大学准教授の杉田このみ氏が監督・撮影を務めた作品『原発被災地になった故郷への旅 福島県南相馬市』がある。この作品は、志賀氏が、故郷である小高の海岸や神社を訪れ、思い出を語っていくという内容である。

冒頭述べたように、東日本大震災から十五年、小高区においては、避難指示解除から十年の節目の年である。

この機会に埴谷・島尾記念文学資料館では、志賀氏と杉田氏をお招きし、この映像作品の上映会とトークイベントを、七月十八日(土)午後一時三〇分から、小高区の浮舟文化会館で開催する。本作品は、小高を含め本市での初上映となるので、ご興味のある方は、足を運んでいただきたい。